

パートⅣ：移住者としての人生

はじめに

1. 私の引っ越しの回数（21回）
 - ①小学校卒業まで 4回
 - ②高校卒業まで 4回
 - ③大学卒業まで 2回
 - ④退職するまで 5回
 - ⑤現在まで 6回
 - * 裾野での生活が一番長い。
 - * 意識としては、大阪。

2. 今は、移動する時代である。
 - ①「終の棲家」は、どこにあるのか。

I. アブラハムから学ぶ移住者としての信仰

1. 分離という概念の重要性
 - (1) 父の家からの分離（創12章）

 - (2) 甥のロトとの分離（創13章）

 - (3) イシュマエルとの分離（創21章）

 - (4) イサクとの分離（創22章）

 - (5) 妻のサラとの分離（23章）
 - ①マクペラの墓地の購入
 - ②創22：20～24 親族の情報が届いた。
 - ③里心を断ち切るアブラハム

2. 約束の地にしか将来がないとの確信
 - (1) そこから、帰るべき天の故郷を見上げる信仰が生まれた。

 - (2) ヘブ11：8～10

Heb 11:8 信仰によって、アブラハムは、相続財産として受け取るべき地に出て行けとの召しを受けたとき、これに従い、どこに行くのかを知らないで、出て行きました。

Heb 11:9 信仰によって、彼は約束された地に他国人のようにして住み、同じ約束をともに相続するイサクやヤコブとともに天幕生活をしました。

Heb 11:10 彼は、堅い基礎の上に建てられた都を待ち望んでいたからです。その都を設計し建設されたのは神です。

3. 信仰の決断は物理的、精神的に、移住者となることから始まる。

II. 次の移住への期待

1. 1テサ4:15~18

1Th 4:15 私たちは主のみことばのとおりに言いますが、主が再び来られるときまで生き残っている私たちが、死んでいる人々に優先するようなことは決してありません。

1Th 4:16 主は、号令と、御使いのかしらの声と、神のラッパの響きのうちに、ご自身天から下って来られます。それからキリストにある死者が、まず初めによみがえり、

1Th 4:17 次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らといっしょに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることになります。

1Th 4:18 こういうわけですから、このことばをもって互いに慰め合いなさい。

- (1) 次の移住は、携挙である。

- ①携挙は、大患難時代の前に来る。

- ②それゆえ、試練の中にいる人には慰めであり、希望である。

- (2) 携挙の条件は、すべて整っている。

- ①それゆえ、いつ携挙が来てもよいように日々歩むのである。

2. 使1:10~11

Act 1:10 イエスが上って行かれるとき、弟子たちは天を見つめていた。すると、見よ、白い衣を着た人がふたり、彼らのそばに立っていた。

Act 1:11 そして、こう言った。「ガリラヤの人たち。なぜ天を見上げて立っているのですか。あなたがたを離れて天に上げられたこのイエスは、天に上って行かれるのをあなたがたが見たときと同じ有様で、またおいでになります。」

- (1) 子なる神の地上への移住が起こる。

- ①王としての再臨である。

- ②地上に千年王国が設立される。
- ③このことは、黙 19 : 11～21 で成就する。

(2) 千年王国が人生のゴールであるなら、人生の視点が革命的に変化する。

- ①それは、「御国の視点」である。
(例話) ピンから逆算した第一打の置き所
- ②ものごとの判断の基準が、単純化された不動のものとなる。
- ③私たちの人生は、「神の栄光」をゴールとした人生となる。

3. 黙 21 : 1～4

Rev 21:1 また私は、新しい天と新しい地とを見た。以前の天と、以前の地は過ぎ去り、もはや海もない。

Rev 21:2 私はまた、聖なる都、新しいエルサレムが、夫のために飾られた花嫁のように整えられて、神のみもとを出て、天から下って来るのを見た。

Rev 21:3 そのとき私は、御座から出る大きな声がこう言うのを聞いた。「見よ。神の幕屋が人とともにある。神は彼らとともに住み、彼らはその民となる。また、神ご自身が彼らとともにおられて、

Rev 21:4 彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってくださる。もはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しみもない。なぜなら、以前のものが、もはや過ぎ去ったからである。」

(1) 千年王国の先にある永遠の秩序の希望

- ①三位一体の神は、私たちをそこに移住させようとして働いておられる。